



必要とされる 病院を目指して

札幌市医師会豊平区支部
札幌ライラック病院 院長
下村 晴信

2010年帝国データバンクの医療機関倒産集計が発表された。医療機関の倒産41件、負債総額352億円、この数字は法的整理のみで私的整理は含んでいない数字だそうである。中には放漫経営もあろうかと思うが、病院経営は非常に『厳しく難しい』局面がこれからも確実に続いて行くであろうと肌身で感じる思いである。

生々しい数字を見ながら、これからの病院経営には何が必要なのであろうか、小生の狭い見識の範疇での思いであるが、言い古されたとおり『必要とされる病院』を明確に想定し、それに向かって準備を整えていく姿勢が大事なのではないだろうか。翻って私が院長を務める病院は167床の小規模病院であるが、『必要とされる病院』を想定して変化させてきたつもりである。この間の経験が何かのお役に立てばと思ひ誌面をお借りする。

小院は昭和60年に開院し、今年で開院26年目を迎える。この間、慢性期医療を主体に取り組んで四半世紀が過ぎたわけだが、平成18年の医療制度改革で打ち出された『療養病床の再編成』、いわゆる介護保険病床の廃止、療養病床の大幅削減方針を受け、危機感を強めたことから自院の現状と医療資源を再検証した。

結果、①重度意識障害・神経難病患者など医療ニーズの高い患者が多数を占める②医師・看護師とも数的余裕をもって配置しているなどから、一般障害者病棟への転換が可能であった。しかしすでに障害者病棟であることだけでは『必要とされる病院』と言える状況ではなく、さらに一步踏み込んだ医療資源の活用を検討した結果、呼吸管理経験のある麻酔科医師2名、ALS等の呼吸器使用患者に対応する神経内科医を中心に、慢性期人工呼吸器患者に特化した一般障害者病棟を運営することが、今から取り組める『必要とされる病院』づくりなのではないかと考え準備に取りかかった。

看護部、その他メディカル部門の全面協力のもと、翌平成19年には介護保険病床58床返上、さらに一般障害者病床13：1への転換、障害者病床の10：1ランクアップ、障害者病床90床への増床。看護部では同時進行で他病院での呼吸器研修、勉強会、講習会への参加、さらに看護師の増員、臨床工学技士

の採用、非常用電源の増設、モニター有線化工事などハード・ソフト両面から病棟環境の整備を行い受け入れ準備を進めたが、『療養病院』のイメージが強い当院で、人工呼吸器患者を受け入れる病棟を新設したことをどのように周知していくかが大きな問題であった。HPでの周知はもちろんであるが、地域連携部のネットワークを利用することで、市内病院への周知は比較的早くできると考えた。

他方、地方における人工呼吸器患者の受け入れ先不足が深刻であることも踏まえ、地方病院への周知活動にも力を入れていくこととした。地方への周知活動は地域連携部が主体となり、地方病院への訪問活動を積極的に行っている。訪問の際にはパンフレット等では情報量に乏しいため、①紹介元担当者が苦慮している②ご家族が高齢の場合、病院見学等が難しい③知りたい情報が少ない一等等も問題になると考え、病院案内DVDを作成し配布している。DVDには院内案内、商業施設や金融機関も含めた周囲の環境、交通アクセス、駐車場等をテレビで見ることができるため、家族内でのコンセンサスが取りやすくなる等の効果を期待している。

現在、人工呼吸器患者の受け入れ相談は関東、東北など全国に広がりつつあり、その病状も多岐にわたるようになっている。特に神経内科を標榜しているためALS患者の受け入れ要請が増加、今後ますます増えていくものと思われる。

平成19年に人工呼吸器1台から始まり、現在は50台の人工呼吸器が稼働しているが、今後は呼吸器リハの提供、ケアの質向上はもちろん、レスパイトケアへの取り組み、患者用インターネット環境の向上など、ソフト・ハード面での充実を図っていきたい。

また、50台の人工呼吸器が動き出すと想定外の問題が起こるものである。誌面の関係上一例のみ紹介したい。

昨年夏は北国らしからぬ高温・多湿で、当院では外気を2℃ほど下げて病室へ取り入れているが、外気が30℃を超えると室内に入る空気は感覚的に外と変わらない温度となる。台数が少なかった一昨年夏では大きな影響はなかったが、50台の人工呼吸器の排熱は強烈なものがあつた。検討の結果、病室全50室に今年夏までにエアコンを設置する予定となっている。

今後もソフト・ハード両面の充実を図ることで患者に選ばれる病院づくりを展開し、『必要とされる病院』であり続けたいと考えている。